

# 英語史の研究

寺 澤 盾

2009年に上梓された *Historical Thesaurus of the Oxford English Dictionary: With Additional Materials from A Thesaurus of Old English*, 2 vols. (Oxford University Press) については、『英語年鑑 2011』の「英語史の研究」で紹介し、「この辞典を参照することによって、さまざまな概念・事物を表わす語彙の歴史の変遷を一望することが可能となった。今後、このシソーラスを用いたさまざまな研究成果が待たれる」と記した。2014年に刊行された David Crystal, *Words in Time and Place: Exploring Language through the Historical Thesaurus of the Oxford English Dictionary* (Oxford University Press) は HTOED から得られた最初の大きな実りの一つと言えるだろう。「死」、「金銭」、「酒酔い」、「売春婦」など 15 の意味領域においてどのような語が用いられまた消えていったか、過去から現代にかけての英語語彙の栄枯盛衰がクリスタルによって軽妙に語られている。

以下では、2014年1月～12月に刊行された英語史関連の文献をできるかぎり広く紹介していきたい。文献情報収集にあたっては三浦あゆみ氏のウェブページ *A Gateway to Studying HEL* (「2014年刊行文献」) を参照させていただいた。

## I. 通 史

英語史全般を扱った書物としては、国内では安井稔・久保田正人『知っておきたい英語の歴史』(開拓社)が挙げられる。本書は安井氏が以前執筆した「英語史」(中島文雄[編]『英語学概論(上)』, 1951, pp. 69-125)を増補改訂し、それに氏の英語史関連の論考を加えたものである。「最もよく英語の変化、歴史を知る方法は、実は、英語史を読むことではなく、古い時代のテキストを読むことである。英語史と銘打ったいかなる書も、ただ、生きた英語の変化、英語の歴史への案内役を果たすにすぎない。したがって、英語史のみを読んでいる人々は、英語の歴史はわからない、というのは単なるパラドクスではない」(vi-vii)という安井氏の言葉を英語史研究者として心に残しておきたい。Henry Hitchings の *The Secret Life of Words: How English Became English* (『英語年鑑 2010』で紹介)は一般向けの英語史本として好評を博していたが、その邦訳(田中京子訳『英語化する世界、世界化する英語』[みすず書房])が刊行されたことも書き添えておく。

国外では、Elly van Gelderen, ed. *History of the English Language* (Routledge) が注目される。これは、4巻(第1巻「音韻」、第2巻「統語」、第3巻「意味・語用・

コーパス」, 第4巻「社会言語学」)からなる英語史分野の重要論文のアンソロジー(65編所収)であり, Otto Jespersen, “The Great Vowel Shift” (1909), Charles Fries, “On the Development of the Structural Use of Word-Order in Modern English” (1940), Elizabeth Closs Traugott, “On the Rise of Epistemic Meanings in English: An Example of Subjectification in Semantic Change” (1989), William Labov, “The Social Motivation of a Sound Change” (1966)など貴重な論文の文字通り宝庫と言える。なお, van Gelderenは英語史入門書を2006年に上梓しているが, その改訂版が出版された(*A History of the English Language*. Revised ed. [John Benjamins]). 英語史入門書としてはほかに Thomas Kohonen, *Introduction to the History of English* (Peter Lang)が挙げられるが, これは英語の内面史と外面史を有機的に結び付け, 各章末に課題・練習問題が付されている。

音韻の歴史を扱ったものとしては, Donka Minkova, *A Historical Phonology of English* (Edinburgh University Press)が挙げられる。古英語から現代英語にかけておこった音韻変化をたどることによって, 現代英語の音韻体系の理解が深められる構成になっている。最終の第10章は Cædmon から Chaucer までの韻律史を扱っている。

語彙史を扱ったものとして冒頭で Crystal の書物にふれたが, 2014年度は語彙研究が豊作であった。Julia Cresswell, *Little Oxford Dictionary of Word Origins* (Oxford University Press)は「怒り」, 「食物」, 「結婚」など100の意味領域に属する1000語についてその興味深い語源を紹介した一般向けの語源小辞典である。Bozena Duda, *The Synonyms of Fallen Woman in the History of the English Language* (Peter Lang)は‘fallen woman’という意味領域で古英語から初期近代英語まで用いられた類義語(婉曲表現・蔑視表現)を分析し, 女性に関わる語彙には「意味の下落(pejoration)」が広く見られることを指摘。現在 OED の編集主幹代理を務め語源を担当している Philip Durkin による *Borrowed Words: A History of Loanwords in English* (Oxford University Press)も良書である。英語は借用語が多い言語として知られるが, Durkin は英語の借用語について時代ごとに, いつ・どのように・なぜ英語に借用されたのかをわかりやすく解説している。英語の語形成を扱ったものとして次の3冊が管見に入った。1) Horace Gerald Danner, *A Thesaurus of English Word Roots* (Rowman & Littlefield Publishers), 2) R. M. W. Dixon, *Making New Words: Morphological Derivation in English* (Oxford University Press), 3) D. Gary Miller, *English Lexicogenesis* (Oxford University Press)。1)ではギリシャ語やラテン語由来の英語の語根がアルファベット順に配置され, それぞれの語根から派生したさまざまな英単語がリストアップされている。語根の意味を知ることで見出しの英単語の意味もおおよそ推測することができ英語の語彙学習にも有益である。2)は200に及ぶ英語の接辞が今日どのように新語形成に寄与しているのか考察し, なぜ undistinguished は可能なのに

indistinguished とは言わないのかといった英語の不思議も解明してくれる。3) は英語の語形成で用いられるさまざまな手段(派生, 複合, 混成など)にふれつつ語彙史を記述している。最後に、辞書史として Malgorzata Anna Kaminska, *A History of the Concise Oxford Dictionary* (Peter Lang) を挙げたい。COD は日本においても英語(上級)学習者に根強い人気があるが、本書ではこの辞書が初版(1911)から現在までどのような改訂・変容を遂げてきたかをたどり、かつては上級者向けであった COD が現在では user-friendly な方向に変化しているとの指摘は興味深い。

文法についてはまず保坂道雄『文法化する英語』(開拓社)を紹介したい。扱われている個々の文法化の例(冠詞, 存在文を導く there, 助動詞 do など)はいずれも英文法の項目として馴染みのあるもので、一見ばらばらの文法化の事例が「見えざる手」に導かれているかのように一定の方向へ変化しているとの指摘は大変刺激的である。また、言語変化を「進化」の観点から捉えている点も(とくに「外適用」の概念)新鮮である。文法化に関する研究書としては、秋元実治『増補 文法化とイディオム化』(ひつじ書房)も刊行されたが、これは前著『文法化とイディオム化』の改訂版である。新たに論文を2編加え、さらに旧版後の研究成果を補章として盛り込んでいる。海外で出版されたものとしては、P. H. Matthews, *The Positions of Adjectives in English* (Oxford University Press) を挙げたい。これは英語の形容詞がおこる位置について通時的・統語的な観点から論じた研究である。

意味・文体を扱ったものとしては、Lobke Ghesquière, *The Directionality of (Inter)subjectification in the English Noun Phrase: Pathways of Change* (Walter de Gruyter) と Sara Pons-Sanz, *The Language of Early English Literature: From Cædmon to Milton* (Palgrave Macmillan) を紹介しておこう。Ghesquière は名詞を修飾する complete, particular, such などの意味を(間)主観化の観点から分析している。Pons-Sanz は、古英語から初期近代英語にかけておきたさまざまな言語変化が、それぞれの時代の文学作品の作者の文法・語彙の選択にどのような影響を与えたかを考察したもので、英語史と文体論を結び付けた新たな試みである。

最後に、英語史における変異と変化の問題を扱い、ピジンやクレオールの問題にも触れている Daniel Schreier, *Variation and Change in English: An Introduction* (Erich Schmidt Verlag) を挙げておく。

## II. 時代別

<<OE>> 現代英語には The birds sings. のように、主語の人称や数に関係なく動詞の現在形の語尾が -s となる方言が存在するが(Northern Subject Rule [NSR] とよばれる)、これは期初中英語の北部方言に由来すると言われてきた。Marcelle Cole, *Old Northumbrian Verbal Morphosyntax and the (Northern) Subject Rule* (John

## 回顧と展望

Benjamins) は、ノーサンブリア方言が用いられている古英語行間訳聖書『リンディスファーン福音書』を資料として古英語の北部方言の動詞の形態をとくに主語との一致の問題に焦点を当てて考察し、すでに古英語において NSR が存在していたと指摘する。Vlatko Broz, *Aspectual Prefixes in Early English* (Peter Lang) は、古英語から中英語期におけるアスペクト関連の接頭辞 (e.g. 完了相を表す for-, a- など) を考察する。Peter Petré, *Constructions and Environments: Copular, Passive, and Related Constructions in Old and Middle English* (Oxford University Press) は古英語から中英語にかけての受動文 (be + p.p.) を考察したもので、古英語で用いられていた受動態形式の一つである *weorþan* + p.p. が消失した原因にもふれている。Don Ringe and Ann Taylor, *The Development of Old English* (Oxford University Press) は *A Linguistic History of English* の第 2 巻でゲルマン祖語から古英語までの発達を記述。Fran Colman, *The Grammar of Names in Anglo-Saxon England: The Linguistics and Culture of the Old English Onomasticon* (Oxford University Press) は、古英語期のイングランドにおける人名について、語源など言語的な側面だけでなく社会における役割を考察したものである。Michiko Ogura, ed. *Aspects of Anglo-Saxon and Medieval England* (Peter Lang) は古英語の論文集であるが、日本中世英語英文学会と縁が深い欧米の 6 名の学者 (Eric G. Stanley, Fred C. Robinson, Jane Roberts, Joyce Hill, Paul E. Szarmach, Graham D. Caie) と著者による論文を所収。

<<ME>> まず初めに日本人による研究書を紹介したい。中英語では同じ感情動詞であってもあるものは非人称構文で用いられ、あるものは人称構文で用いられるが、Ayumi Miura, *Middle English Verbs of Emotion and Impersonal Constructions: Verb Meaning and Syntax in Diachrony* (Oxford University Press) は、中英語における感情を表す非人称動詞の詳細な研究によって、非人称構文が選択される要因を明らかにしている。Yasuyo Moriya, *Repetition, Regularity, Redundancy: Norms and Deviations of Middle English Alliterative Meter* (Hituzi Syobo Publishing) は 20 作品に及ぶ中英語頭韻詩 (23,000 余行) の韻律を詳細に調査し、個々の作品の韻律的特徴を記述している。ほかに、チョーサー研究会発足 20 周年を記念した論文集 (チョーサー研究会・狩野晃一編『チョーサーと中世を眺めて——チョーサー研究会 20 周年記念論文集』[麻生出版]) も刊行された。池上恵子「「尼僧院長の話」(The Prioress's Tale) と聖者伝」、Masatoshi Kawasaki, “‘up and down to wynde’ (ll. 601): Criseyde's Mental Court in *Troilus and Criseyde*”, Setsuko Haruta, “‘Virgile, Ovide, Omer . . .’ and Chaucer's Criseyde”, 田辺春美「『カンタベリー物語』の語り手の社会階級からみた語用標識としての this について」など 25 篇の論文が収録されている。

このほか中英語関連のモノグラフとしては以下のものが挙げられる: 14 世紀から 15 世紀にかけての英語の料理用語について当時のレシピから収集した 100 を超える動詞

を分析した Magdalena Bator, *Culinary Verbs in Middle English* (Peter Lang); 中英語におけるゲルマンおよびロマンス語起源の接尾辞について抽象名詞を形成するものに焦点を当てて調査した Anne-Christine Gardner, *Derivation in Middle English: Regional and Text Type Variation* (Société Néophilologique); LALMEを用いて初期中英語(とりわけ中東部と中西部方言)における言語変化を diffusion のモデルを用いて分析した Nicole Studer-Joho, *Diffusion and Change in Early Middle English: Methodological and Theoretical Implications from the LAEME Corpus of Tagged Texts* (Francke Verlag). 中英語の論文集 Michael Bilynsky, ed. *Studies in Middle English: Words, Forms, Senses and Texts* (Peter Lang) には、以下の日本人研究者による論文も収められている: Ryuichi Hotta, “Textual Characteristics of the *Poema Morale*”; Fuyo Osawa, “Why Has an Article System Emerged?: The Shift from Parataxis to Hierarchy”; Fumiko Yoshikawa, “The Mapping of Rhetorical Strategies Related to Persuasion in Middle English Religious Prose”.

<<ModE>> 日本の近代英語研究を牽引してきた近代英語協会は 2014 年度で創立 30 年を迎えたが、それを記念する論文集 Ken Nakagawa, ed. *Studies in Modern English: The Thirtieth Anniversary Publication of the Modern English Association* (Eihosha) が刊行された。Jane Roberts, Terttu Nevalainen, Minoji Akimoto による特別寄稿のほか、24 編(形態・語彙 5 編, 統語 8 編, 意味・語用 5 編, 文体 6 編)所収。このほか近代英語関連の研究書としては以下のものが管見に入った。Kirsten Gather, *Syntactic Dislocation in English Congregational Song between 1500 and 1900: A Corpus-based Study* (Peter Lang) は近代英語期の讃美歌の歌詞における syntactic dislocation (通常の語順からの逸脱) を韻律などの観点から考察したものである。Julian Lamb, *Rules of Use: Language and Instruction in Early Modern England* (Bloomsbury Publishing) は、初期近代英語期の教育者が適切な英語の使用を明示的に定式化しようとした試みが失敗に終わったことを Roger Ascham, George Puttenham, Richard Mulcaster などに焦点を当てて論じる。Gabriele Stein, *Sir Thomas Elyot as Lexicographer* (Oxford University Press) は Sir Thomas Elyot による羅英辞典(1538) についてその出版に到った理由やその後の辞書への影響が詳述されている。2014 年はジェーン・オースティンの長編小説 *Mansfield Park* が出版されて 200 年記念となるが、オースティンに関する新たな研究書 Ingrid Tieken-Boon van Ostade, *In Search of Jane Austen: The Language of the Letters* (Oxford University Press) が上梓された。著者は、これまであまり研究されることのなかったオースティンの手紙を社会言語学的観点から詳細に分析し、当時の口語がどのようなものであったのか明らかにしようとしている。論文集としては、後期近代英語期に生じた形態・統語変化を論じた Marianne Hundt, ed. *Late Modern English Syntax* (Cambridge University Press) が

挙げられる。

<<PDE>> prescriptivism という 18~19 世紀の英語の問題と考えられがちであるが, Anne Curzan, *Fixing English: Prescriptivism and Language History* (Cambridge University Press) は規範主義の問題を現代英語にも見てとり, マイクロソフト社の文法チェッカーが果たす役割や性差別的言説を排除しようとする運動など現代英語を規制しようとする流れを分析している. a tailor のように性別が不詳の名詞を he で受ける用法は今日では性差別的言い方として批判される危険性をはらんでいるが, Laura Paterson, *British Pronoun Use, Prescription, and Processing: Linguistic and Social Influences Affecting 'they' and 'he'* (Palgrave Macmillan) はこうした場合 he と they のどちらが選択されるかを考察したものである. 2000 年以降のイギリス英語のコーパスに基づき詳細に調査が行なわれ, 数の不一致は生じるが they が優勢であることが示されている.

Giuseppina Balossi, *A Corpus Linguistic Approach to Literary Language and Characterization: Virginia Woolf's The Waves* (John Benjamins) はヴァージニア・ウルフの実験的小説である *The Waves* に登場する人物の会話の言語的特徴をコンピュータで分析する. Raffaella Zanuttini and Laurence Horn, eds. *Micro-Syntactic Variation in North American English* (Oxford University Press) は論文集であるが, アメリカ英語におけるさまざまな興味深い統語現象 (e.g. 南部方言における We might should be thinking. のような multiple modals, ピッツバーグ周辺における needs washed など) を扱った 9 本の論文を所収.

### III. 論文集 (すでにふれた論文集については割愛)

まずは歴史語用論という新たな分野に関わる 2 つの論文集を紹介したい. 金水敏・高田博行・椎名美智 (編) 『歴史語用論の世界——文法化・待遇表現・発話行為』(ひつじ書房) は, 日本語・英語・ドイツ語関連の論文を所収. 英語関係の論文としては, 福元広二「初期近代英語期における仮定法の衰退と I think の文法化」(第 2 章), 椎名美智「初期近代英語期の法廷言語の特徴——「取り調べ」における「呼びかけ語」の使用と機能」(第 4 章), 片見彰夫「中世イングランド神秘主義者の散文における説得の技法」(第 7 章), 中安美奈子「シェイクスピアにおける説得のコミュニケーション——法助動詞を中心に」(第 8 章) がある. Irma Taavitsainen, Andreas H. Jucker and Jukka Tuominen, eds. *Diachronic Corpus Pragmatics* (John Benjamins) は歴史語用論とコーパスという最近の英語史研究の 2 つのトレンドを結びつけたもので, 英語, スウェーデン語, イタリア語, フィンランド語, 日本語などを対象にした論文を掲載. 英語史関連のものとしては, Jukka Tyrkkö, “‘Strong Churlish Purging Pills’: Multi-adjectival Premodification in Early Modern Medical Writing in English”, Maria José

López-Couso and Belén Méndez-Naya, “On the Origin of Clausal Parenthetical Constructions: Epistemic/evidential Parentheticals with *seem* and Impersonal *think*”, Andreas H. Jucker and Irma Taavitsainen, “Complimenting in the History of American English: A Metacommunicative Expression Analysis”, Dawn Archer, “Exploring Verbal Aggression in English Historical Texts Using USAS: The Possibilities, the Problems and Potential Solutions” がある。

記念論文集としては、Kari E. Haugland, Kevin McCafferty and Kristian A. Rusten, eds. *‘Ye whom the charms of grammar please’: Studies in English Language History in Honour of Leiv Egil Breivik* (Peter Lang) が刊行された。これは存在文の史的研究 (*Existential there: A Synchronic and Diachronic Study*) で知られるノルウェーのベルゲン大学名誉教授 Leiv Egil Breivik に献呈されたもので、Kari E. Haugland, “*Pa rinde hit & Þær comun flod & bleövun vindas*: On Expletives and Word Order in Old English”, Gard B. Jensen, “In Search of the S (curve) in *there*” など 16 本の論文を収録。一方、Jukka Tyrkkö, Olga Timofeeva and Maria Salenius, eds. *Ex Philologia Lux: Essays in Honour of Leena Kahlas-Tarkka* (Société Néophilologique) は、*The Uses and Shades of Meaning of Words for “every” and “each” in Old English: With an Addendum on Early Middle English Developments* (1987) などの著者として知られるヘルシンキ大学の Leena Kahlas-Tarkka に献呈された退職記念論文集である。Alaric Hall and Samuli Kaislaniemi, “‘You Tempt me Grievously to a Mythological Essay’: J.R.R. Tolkien’s Correspondence with Arthur Ransome” など 24 の論文所収。Sarah Buschfeld, Thomas Hoffmann, Magnus Huber and Alexander Kautzsch, eds. *The Evolution of Englishes: The Dynamic Model and beyond* (John Benjamins) は、*Postcolonial English: Varieties around the World* (2007) の著者として知られる Edgar Schneider の 60 歳の誕生日を記念した論文集で、世界に広まったさまざまな英語の変種に関する論文 27 本が収められている。

学会の成果をまとめた論文集としては、まず 2012 年にブルーミントン (インディアナ州) で行なわれた第 7 回英語史学会 (SHEL) の発表論文の一部を収録した Michael Adams, Laurel Brinton and R. D. Fulk, eds. *Studies in the History of the English Language VI: Evidence and Method in Histories of English* (Walter de Gruyter) を挙げたい。Reijirou Shibasaki, “On the Grammaticalization of *the thing is* and Related Issues in the History of American English” など古英語から現代英語まで英語史に関わる論文 13 本が収められている。Massimo Sturiale, Carmela Nocera and Giovanni Iamartino, eds. *English Words in Time* (Polimetrica) は 2008 年にイタリアで開かれた “Words in Time” (Geoffrey Hughes の著書名に因む) というコロキウムで発表された論文集である。Alejandro Alcaraz-Sintes and Salvador Valera-Hernández, eds.

*Diachrony and Synchrony in English Corpus Linguistics* (Peter Lang) は 2012 年にスペインで開催された第 4 回コーパス言語学国際学会 (IV International Conference on Corpus Linguistics) で発表された論文の選集で, Matti Rissanen, “On English Historical Corpora, with Notes on the Development of Adverbial Connectives” など所収. 2011 年大阪で開催された国際学会 Middle and Modern English Corpus Linguistics で報告された研究成果をまとめた論文集 (2 冊組) の 1 冊 Yoko Iyeiri and Jennifer Smith, eds. *Studies in Middle and Modern English: Historical Change* (Osaka Books) も刊行された. Irma Taavitsainen, “How to Study Changes in Medical Discourse 1375–1800: Corpus Compilation and Corpus Linguistic Studies”, Yoko Iyeiri, “The Shift from *Alway* to *Always* in the History of English” など 7 篇が収められている.

そのほかの論文集としては, Simone E. Pfenninger, Olga Timofeeva, Anne-Christine Gardner, Alpo Honkapohja, Marianne Hundt and Daniel Schreier, eds. *Contact, Variation, and Change in the History of English* (John Benjamins) は言語変異や言語接触という観点から英語史を考察した論文 14 篇所収. Irma Taavitsainen, Merja Kytö, Claudia Claridge and Jeremy Smith, eds. *Developments in English: Expanding Electronic Evidence* (Cambridge University Press) はコーパス言語学や英語史関連の論文 14 本が収められているが, 日本人研究者からの寄稿として Minoji Akimoto, “On the Functional Change of *Desire* in relation to *Hope* and *Wish*” があ

#### IV. 学術誌掲載論文

2014 年に国内の学術誌に掲載された英語史関連の論文を以下, 学術誌別にリストアップしておく. 昨年同様, 国内紀要に発表された論文に関しては残念ながらスペースの都合上割愛せざるを得なかったが, 『英語年鑑』の「個人研究業績一覧」を参照されたい.

<*Studies in Medieval English Language and Literature* No. 29> Cynthia L. Allen, “Old English and the Syntactician: Revisited”, Yukie Mori, “Interpreting the Dragon and the Bear in Arthur’s Prophetic Dream in Geoffrey of Monmouth’s *Historia Regum Britanniae*”, Hiroki Okamoto, “‘Wassail’ and History in the Middle English Romance *Havelok the Dane*”, Yuzuru Okumura, “Northern Elements in London English: Re-examining the Language of the Auchinleck Couplet *Guy of Warwick*”, Dylan Jones, “Medieval Grist to the Renaissance Mill?: Chaucer’s *Reeve’s Tale* and its Forgotten Analogue *The Mylner of Abyngton*”; <*Studies in English Literature* English Number 55> Masami Nakayama, “The Complex Behavior of



the Second Person Pronoun *Ye* in 19th-Century English Novels”; <『日本英文学会第 86 回大会 Proceedings; 付 2013 年度支部大会 Proceedings』> 杉浦克哉「英語における分詞関係節の史的発達について」、茨木正志郎「素性の経済性による定冠詞の文法化の研究」、中尾佳行「英語の発達から英語学習の発達へ——法助動詞の第二言語スキーマ形成を巡って」、濱口恵子「*The Man of Law's Tale*における Anglo-Saxon の世界と Englishness」、岡本広毅「サクソン人からイングランド人へ——中英語年代記における民族・国家意識の諸相」、唐戸信嘉「南北の文化圏の成立——人文科学の発展と Anglo-Saxonism の深化」、山村崇斗「英語史における助動詞後位省略現象について」、堀田隆一「初期近代英語以降の名前動後の拡大と S 字曲線」、澤田真由美「後期中英語における不定詞補文の拡大——統語変化の拡散における variants の選択の問題をめぐる」、鈴木大介「後期近代英語における言語変化の進行過程——法性を表す副詞の分析例から」、久米祐介「同族目的語構文の統語・意味変化について」、杉浦克哉「With 独立構文の歴史的発達について」、山村崇斗「古英語における疑似空所化について」、中尾佳行「*Chaucer's Troilus and Criseyde*における“assege”——<器>(内, 境界, 外)の認知プロセスを探る」、片見彰夫「中世キリスト教神秘主義者にみられる Politeness の表現」、椎名美智「初期近代英語期・喜劇と裁判における Politeness」; <『英文学研究支部統合号第 7 巻』(『関東英文学研究』第 7 号)> Shota Kikuchi, “Relativizers in Shakespeare’s Drama: A Sociolinguistic Study” (若手奨励賞 (村山賞) 受賞論文); <『英文学研究支部統合号第 7 巻』(『中国四国英文学研究』第 11 号)> Ashie Sadayuki, “The Implicit Allusion to the Epilogue of *Confessio Amantis* in the Ending of *Our Mutual Friend*”; <POETICA 81> Tadashi Kotake “Aldred’s Wanderings between Literal and Free Renderings: Some Manuscript Evidence”, Manabu Agari, “New Compositors at Work in Caxton’s Malory”, Ernest P. Rufluth, “Courting Disaster: Hunting and Wooing in Shakespeare’s *Venus and Adonis*”; <English Linguistics Vol. 31> Michiko Ogura, “What Really Happened to Impersonal Constructions in Medieval English”; <『近代英語研究』No. 30> Masami Nakayama, “*It is I* vs. *It is me* in 19th-Century English Novels”, Daisuke Suzuki, “The Functional Development of the Modal Adverbs in the History of English”, Takefumi Watanabe, “Semantic Change in English: A Case Study of ‘involved’”, Tomoyuki Tanaka, “A Note on Modal Passives in Early English”.

(東京大学教授)